



TITLE:

<研究ノート>職業教育における「
労働力再生産」分析の新たな視座
を求めて：インフォーマルな再生産
過程と家事労働者の再生産過程へ
の着目

AUTHOR(S):

増田, 仁

CITATION:

増田, 仁. <研究ノート>職業教育における「労働力再生産」分析の新たな視座を求めて：
インフォーマルな再生産過程と家事労働者の再生産過程への着目. 教育・社会・文化：研
究紀要 2002, 8: 39-48

ISSUE DATE:

2002-07-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187229>

RIGHT:

職業教育における「労働力再生産」 分析の新たな視座を求めて

—インフォーマルな再生産過程と
家事労働者の再生産過程への着目—

増 田 仁

New Perspectives about Reproduction of “Labor Force” at Vocational Education

—Focusing on the “Informal” Process of Reproduction,
and the Reproduction of the “Domestic Laborer” —

Megumi MASUDA

1. 問題の所在

1-1 一般的な職業教育観

職業教育は教育制度と労働市場がダイレクトにリンクされている場であり、常に学校と労働市場の連結が問題とされる。それは、教育の場から労働の場へと人間をスムーズに「移動」させる場であるという認識を広く持たれたため、様々な理想を抱かれる対象ともなってきた。例えば、市場が要求する職業技術と労働者がもつ技術の「ミスマッチ」、若者の高い転職率や失業率、これらの社会問題は職業教育の改革によって改善することができるという考え方が広く支持されてきた（伊藤ほか,1977,162）。職業教育改革によって様々な社会問題を解決しようとするこのような考え方は、現代の日本においても広く見受けられる。中学校では「総合的学習」が制度化され、高等学校でも職業科を中心に「体験学習」が脚光を浴びている。そこで目標とされているのは、労働現場での「労働体験」を通じて、労働に対する意識を高め、自分の「適性」を見出すことである。つまり、学校と労働市場の境界をゆるめ、学校領域の一部を労働市場に移行させる試みである。このように、教育行政による職業教育改革においては、職業技術が問題化される。経済界からも生徒の職業技術を重視する言説は多い。しかし職業教育の現場と労働市場の接合は技術のみを介してなされるのではない。

1-2 本稿の論点

本稿は職業教育を広義の「労働力再生産」過程として分析するための基礎作業である⁽¹⁾。その目的は、職業教育をみるうえで、「労働」と学校との関係づけられかたをどのように分析するか、先行研究に依りつつその方法論を再検討することである。本稿は、職業教育と労働市場の接合のされ方を見ていく際には、ジェンダーというファクターをどのように考えるかが重要な問題であると考え。特に女性の「職業」教育は、賃労働に関わる教育だけでなく、家事と結び付けられる教育(家庭科教育)をも視野に入れて、考察される必要がある。なぜなら、女性の「労働」は労働市場だけでなく家庭でも行われてきたからである。女性に対しては、次世代の労働者を生産(つまり出産および育児)すると共に、夫の世話をを行うことで賃労働を支える「労働」(再生産労働)があてがわれた。資本主義社会は、女性によって遂行されるこの無償労働を取り込むことで、結果的に労働力の再生産を滞りなく行っているのである。ここから家事労働は、労働市場と家庭をつなぐミッシング・リンクといえる位置にあることが分かる(上野,1990,31)。つまり、女子生徒という将来の賃労働者あるいは家事労働者をどのように再生産するのか、という女子「職業」教育の方向性をめぐる議論は、社会において女性労働をどのように位置づけ、さらにはどのような家庭と労働市場の関係を構築していくのか、という問題に関わってくるのである。

ただレジョヴァンナ・フランカ・ダラ・コスタが指摘するように、家事労働者の「労働」も、賃労働者のそれと同じく狭義の技術のみにとどまるものではない。家事労働には、ダラ・コスタが「愛の労働」と呼ぶような、自発的にかつ無制限に行われる夫への——感情的なものを含む——サービスが含まれている(ダラ・コスタ,1991,24/30-31)。それゆえまた、職業教育殊に家庭科の現場が家事労働の現場と結び付けられる際にも、フォーマルな家事の技術の教育ばかりでなく、インフォーマルな「愛の労働」の教育すら媒介となり得るのである。

本稿は、まず職業技術を介した職業教育と労働市場の「連結」に着目する従来の視点を概観し、1960年代以降にこうした視点の批判として現れた、職業教育と労働市場の「ズレ」、および職業技術以外の回路によるインフォーマルな接合のされ方に着目する視点について検討する(以上第2章)。次に、米国の進歩主義の時代(Progressive Era)における女性の「職業」教育(家庭科と商業科)に関する先行研究をリファアーしながら、賃労働だけでなく家事労働と「職業」教育の関係づけられ方について検討を行う⁽²⁾。そして家庭科と家事労働との接合が、家事に関する技術だけでなく、「思いやり」や「愛情」といったコードによっても、インフォーマルに行われていることを指摘し、このようなコードによって、家庭科教育を受けた女性が、家族構成員の感情を制御し「健全な家庭」の維持を支える存在となっていくことを論じていく。また、商業科と賃労働との接合も、職業技術によってのみならず、「礼儀作法」や「レディとして振る舞えること」といったコードによっても、インフォーマルに接合されていることを指摘し、このようなコードを介して、女性がいったん賃労働者となった後、「良い」条件の家庭というもう一つの労働現場に参入していく、という回路が成立していることを論じていく(以上第3章)。そして、こうした検討によって職業教育における「労働力再生産」過程の分析視角がどのように広がったのかを改めて整理・確認すると

ともに、その新しい視角が日本の職業教育に関する分析にいかなる展望をもたらすかを示したいと思う（以上第4章）。

2. インフォーマルな再生産過程の分析へ

2-1 職業教育と労働市場の「連結」という「常識」——技術を媒介とみる見方——

職業教育の見方は便宜上大きく2つに分類することができよう。一つ目は、職業技術を媒介とした職業教育と労働市場の連続性に着目する見方であり、二つ目は技術以外の要素によって職業教育と労働市場の連続性を見たりあるいは双方のズレに着目する見方である。技術を介した職業教育と労働市場の連続性に着目する分析においては、職業教育の役割は、労働市場の要求に見合った職業技術をもつ労働者を生産し、彼（女）らの持つ職業技術の量や質を成績という形で証明し、この成績に応じて階層化・差異化したそれぞれの労働市場に生徒を配分することだとされる（伊藤,1998,28-29）。この議論を推し進めていけば、労働者の優劣は職業技術でのみ判断されるのであるから、階級やジェンダー、エスニシティといった属性は捨象されることになる。つまり、職業教育によって優秀な職業技術さえ得れば、どんな出自であろうが、社会的地位の高い職に就くことができるのであるから、職業教育は差別を解消する有効な手段の一つと見なすことも可能になるだろう。また企業の側から見れば、効率的な職業教育が行われることで、企業内教育にかかるコストを削減することができるようになる（宮地ほか,1975,153）。ここからある種のユートピア的な職業教育観が提示される。

このような機能主義的な見方は、職業教育の拡大を説明する際にしばしば用いられた。特に米国の進歩主義の時代（Progressive Era）において見られた職業教育の拡大について、その原因を労働市場において高度な職業技術に対する要求が高まったためであるとする議論が出されていた（Rodgers & Tyack,1982,270）。

2-2 職業教育と労働市場の「ズレ」への着目——職業教育の「意図せざる結果」——

米国の進歩主義の時代（Progressive Era）における職業教育の拡大を、労働市場が要求する職業技術の上昇から説明する見方に対して、市場から教育現場に要求される職業技術のレベルは果たして本当に上がったのだろうかという疑問も提出された。この時期は特に製造業を中心にオートメーション化が進み、労働のマニュアル化・規格化が進んでいた。労働者には流れ作業の一部を滞りなく担うことが経営者側から期待されたのである。つまり、職業教育は拡大していったが、経営者側から期待される職業技術は向上したとは言い切れないのである（Harvey Kantor & David B. Tyack,1982,6）。また職業教育が拡大した時期は、大量の移民と高校入学者数の増加が一致した時期でもあった。職業教育推進者には職業教育が、「あまり有能でない」、「あまり学問的でない」多数の生徒達に教育を提供する際の手軽な解決策のように見えたのである（Katz,1989,181）。また日本の「高度成長期」においても職業教育（高等学校職業科）は拡大したが、高学歴化が進む中で、高等学校職業科は実質的に成績上普通科に進学できなかった者の受け皿になるという現象が見られた（宮地ほか,

1975,86-88)。このような認識・疑問から職業教育と労働市場のズレに着目する見方が現れてくる。この見方をとる論者は、職業教育の拡大と市場が要求する職業技術の上昇が対応していないことを根拠に、職業教育という場が労働市場の要求に則した技術をもつ労働者を生産している、という前提に疑問を呈している。

また学校は、建前としては能力主義を掲げており、成績による差異化は行いが、生徒の属性に対しては不関与であろうとする。しかし労働市場では、ジェンダー、エスニシティーあるいは階級によって異なる役割が期待される傾向が、見受けられることがしばしばある(Willis,1996,271-272)。そのため職業教育においては、労働市場の要求に歩み寄る必要が生じるため、「意図せざる結果」として学校が階級、ジェンダー、エスニシティーといった生徒間の差異・属性を明確化・固定化・特化する方向に、一定の役割を果たしてしまっている、という議論もなされている(Appleほか,1993,7)。この視点を推し進めていけば、職業教育は不平等の解消・解決よりむしろ既存の不平等を再生産することに結果的に寄与してしまっている、という見方に行き着く可能性も出てくることになる。

2-3 職業教育と労働市場の「隠された」接合形式——インフォーマルな回路への着目——

その一方で、たしかに職業教育は、労働市場が要求するような職業技術を持った生徒の生産には必ずしも貢献していないかもしれないが、職業技術以外の回路において、結果的に職業教育は労働市場と接合されている、という議論がある。この立場をとる論者は職業教育について、職業技術の伝達の間である点よりも、企業が要求する規律を正確に守り、職場のヒエラルキーを受け入れる従順な生徒＝労働者を生産する場であることを、重視している。彼らは、職業教育では時間厳守や規則正しさ、勤勉が尊ばれ、組織の中で労働することのできる人間としての主体化がおこなわれていると指摘する(Rodgers & Tyack,1982,275)。職業教育の現場では、職業技術の伝達を通じて有能な生徒＝労働者を産出し、彼(女)らが上昇移動することを理想として掲げつつも、実際の教育指導においては、生徒に適切な言葉づかいや礼儀作法を身につけさせ、労働現場という組織に適応させていくことを重視する機会が多い。なぜなら市場が職業教育に求めるのは、学校の建前を素朴に信じる生徒＝労働者より、自分より高学歴の上司のもとで労働に励み、組織内のコミュニケーションを乱さない生徒＝労働者を産出する役割だからである(Rodgers & Tyack,1982,276)。

また、労働市場は、ジェンダーやエスニシティー、階級といった生徒の属性に対して、一定の考慮を行う傾向がある。職業教育は生徒の属性には不関与という姿勢を示しつつも、実際には学校文化等を通じて、階級やエスニシティーによって異なる学習＝労働(work)に対する取り組み方を身体化させたり、ジェンダーに特化された言葉づかいや礼儀作法を行う場となってしまっている(Willis,1996,214/315-316/363)。職業教育においては、ジェンダーやエスニシティー、階級といった生徒の属性を特化する形で「労働力再生産」が行われてしまっており、職業技術以外の回路で労働市場との接合を果たす結果となっているといえるのである。

3. 職業教育における家事労働力の再生産の分析へ

3-1 家事労働者形成のための職業教育

社会が期待する労働の内容は男女で異なるために、職業教育においては、他の教育段階に比べジェンダー変数が大きな位置を占める。というのも近代以降、男性には賃労働があてがわれ、女性には子供を育て夫を支えるという再生産労働があてがわれる、という社会構成が維持されているからである。従って職業教育を考える上では、学校と労働市場の関係だけでなく、家庭を加えた3者の関係を見ていく必要がある。女性の労働の中心は、賃労働現場だけでなく家庭でもあるからである。ここから女子生徒に対する職業教育は、労働市場での女性労働者の雇用状況や労働形態、人々が抱く家庭での女性の役割や期待、などの影響を強く受けることになる。家事労働あるいは賃労働の現場において女性はどうのような労働者となることを期待されていたのか、それが家庭科教育と、その他の賃労働に結び付けられる職業教育という、便宜上2つの異なる種類の女子職業教育を規定するのである。

Clifford (1982) は米国における女性と職業教育との関係を歴史的視点を導入して分析している。18世紀後半から19世紀の初期にかけての米国では、職業教育は制度化されておらず、女性は家事使用人として雇われたり、紡績工場などで見習いから正雇用という段階を経由しながら賃労働に従事していた。Cliffordは米国の女性「労働」の歴史的な段階を次のようにまとめている。第1段階は、特に英国植民地時代や初期の共和政の時代に見られた形態である。この時代、公的領域と私的領域は明確に区分されておらず、女性は家業を手伝うことで、直接的に家計を担っていた。第2段階は女性が労働市場に参入し、家庭内での役割と似たような賃労働につくようになる時代である。ここでいう賃労働とは、紡績工場や教師、看護婦といった伝統的な女性職のことを指している。次の第3段階では女性が幅広い職に就くようになるが、他方で結婚や妊娠によって退職してしまう者が大半を占めるようになる。最後の第4段階は、家計補助のために、結婚・出産後も女性が賃労働に従事することが認められる時期である (Clifford,1982,262-263)。

このように米国において女性達は、家庭と労働市場を「移動」していたが、19世紀初期まで教育制度の中で労働者になるための教育を受けていなかった (Clifford,1982,226)。しかし工場法が制定され子供が労働市場から除外されると同時に、義務教育制度が確立し子供が教育制度に吸収された結果、制度としての職業教育が行われるようになっていった。それ以降女性達は、職業教育という制度化された場を経て、家庭を含む労働市場に参入するようになっていったのである。

3-2 インフォーマルなコードを介した家事労働者の形成

しかし、しばしば1人の女性が生涯において、家庭と賃労働の現場の双方で労働に従事する以上、女性に対する職業教育には、一見賃労働に結び付けられる教育にも、実質的には家庭科教育と共通する部分が、多く含まれることになる。

Powers (1992) は、米国の進歩主義の時代 (Progressive Era) に、女性を対象とした

「職業」教育（家庭科と商業科）が制度化されていく過程において、教育関係者や経済界、生徒やその両親が女子「職業」教育に対して、どのような期待や理想を抱いていたのか、また現実にはどのようにこれらの教科が扱われたのかを分析している。女子「職業」教育を制度化させていく過程には、様々な立場の人々が定義した、社会における女性の役割（つまり、家事労働者としてあるいは賃労働者としての役割）が現れてくるとPowersは述べている。

Powersは、女子生徒のための「職業」教育運動と、当時の伝統的価値観および進歩的価値観がどのように関係しているのかに着目する。中流階層向けの商業教育（Commercial Education）推進者の中には少数ながら、経済的自立を果たすことが女性の地位向上につながると考える者が存在していた。しかし大多数の家庭科教育の支持者は、女性の第一の役割は妻や母として家庭を運営し、地域活動に従事することであると考えていたため、中流階層の女性向けの商業教育には批判的であった（Powers,1992,44）⁽³⁾。このような家庭を擁護していこうとする議論に支えられた家庭科は、家事労働者の再生産を次の二つの回路によって行っていた。一つ目は家事に関する技術という回路であり、二つ目は家庭の維持に不可欠な女性による感情的営みを労働として配置するインフォーマルな回路である。

3-2-1 家庭科をめぐる

まず、女子に対する家庭科教育と労働現場の接合関係についてみてみよう。米国の進歩主義の時代（Progressive Era）においては、教育関係者を中心に家庭科教育（家事労働教育）の重要性を強調する議論が見られた。その背景には、生徒や親が賃労働のための教育に熱心で、家庭科には関心を払わなかったことがある（Powers,1992,86）。この時代の米国では、多くの行政関係者や教育関係者は、移民の増加や女性の労働市場への参入によって、伝統的な家庭形態が崩れつつある、と危機感を強めていた。彼（女）らは、家庭科をこのような「家庭の危機」を「改善」し、「健全な家庭」を創るための有効な方法と見なしていた。具体的には、中流階層の妻たちは「科学的」な家事により合理的に家庭を維持し、下層労働者の妻たちは、家計のやりくりを学び、移民は生活をアメリカナイズさせることができると考えられていた。このように女性が家事労働に関する技術を身につけ、「健全な家庭」を維持することが求められたのである。ここでの議論には、家事労働に関する技術を介して家庭科を家庭という労働現場と連結させる思考が見られる。

また離婚率の上昇や出生率の低下に歯止めをかける役割も家庭科に期待されたのである（Powers,1992,22）。離婚率の上昇は、家庭生活に対する脅威であり、家庭が「健全」に運営されていないことを示す指標と考えられていた（Powers,1992,17）。家庭科教育関係者は、「健全な家庭」を維持するためには、家事労働の技術だけでなく、夫や子供のケアを行う際に（つまり「労働力再生産」労働を行う際に）「思いやり」「愛情」「慰め」「励まし」といった資質が必要であると論じていた（Powers,1992,18）。ここでの議論に見られるように、「思いやり」「愛情」「慰め」「励まし」といったコードによっても家庭科は家庭という労働現場と接合していたのである。家庭科は家事労働力化、正確に言えば、家庭という労働現場に参入し、「健全な家庭」を維持し続けることができる労働者の再生産の場となっていたので

ある。

3-2-2 商業科をめぐる

次に女子に対する商業教育と労働現場の接合関係について見てみよう。米国においては、中流階層向けの商業教育が掲げた進歩主義的理想への共感はほとんど得られなかったが、商業教育という教育内容自体は生徒、両親、行政担当者に支持され、飛躍的に拡大していった。19世紀から20世紀にかけて女性の賃労働力率は、1800年の4.6%から1978年の46%へと上昇した。従事する職種も変化し、製造業や家内労働からノンマニュアル・ホワイトカラーの労働が1900年の28%から1940年の45%へと増加していった。さらに平均的な女性労働者の雇用期間が延長し、1890年から1960年の間に3倍以上になった。このような女性の雇用状況の変化もあり、女性が受ける職業教育の内容と、彼女たちが従事する職種との関連が、強くなっていった。女子生徒は商業教育においてタイプライターや速記、簿記等を習得し、その多くが事務員として労働市場に参入していった。

商業教育を受ける女子生徒は急増し、つまり商業教育の「女性化」が進み、その結果労働市場が商業教育に要求する職業技術の男女格差が問題となった。そこで、商業教育では教育の「多様化」が実施され、男女別、職種別で異なる商業教育のカリキュラムが組まれた。こうして職業技術を介した商業教育と労働市場とのさらなる連結が試みられていったのである (Powers,1992,40/113-115)。

しかし商業教育と労働市場との媒介項は、職業技術のみではなかった。商業教育を受けたある生徒は、最も重視されたのは「礼儀作法」「レディとして振る舞えること」「丁寧さ」であったと書いている。またシカゴのある学校では、特に外国生まれの女子生徒に対して「スキンケア」や「姿勢」、「適切な服装」が強調された。このようにカリキュラムには明示されない、職業技術以外のインフォーマルな次元での女子商業教育が行われた背景には、就職において面接が重視され「容姿」や「生まれ」が採用基準に入っていたことがあった (Tyack & Hansot,1990,214)。企業の採用には「生まれ」、つまり階級やエスニシティによるバイアスがかかっており、英語を母国語とする中流階層出身の女子生徒に有利なシステムになっていたのである (Tyack & Hansot,1990,213)。女子生徒に関しては、商業教育と労働市場は、「礼儀作法」や「レディとして振る舞えること」といったインフォーマルなコードによっても回路づけられていたといえよう。さらにこのようなインフォーマルなコードは、階級やエスニシティによって異なっていたのである。

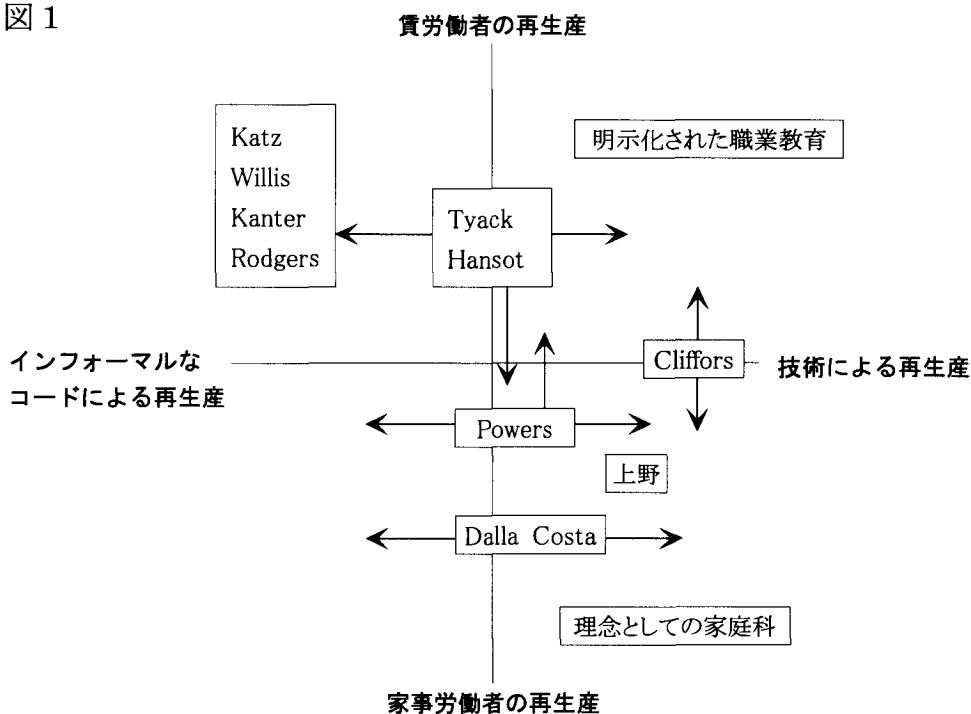
米国の進歩主義の時代 (Progressive Era) における商業教育は中流階層の労働市場と関係づけられており、女子に関してはピンクカラー労働者を生産する場であった。ソーシャル・ワーカーたちは、商業教育と連関のあるオフィス (労働現場) は「洗練された環境」であり、そこでの仕事 (労働) は「文化的価値」や「責任感を伴う」ものである、とオフィスワークを称揚していた (Powers,1992,40-41)。商業教育を受けた女子生徒は、秘書をはじめとする事務員として労働市場に参入し、多くのエリート男性と「出会い」、「良い」条件での結婚、つまり家庭というもう一つの労働現場に「良い」条件で参入する機会を得ていたのである

(Powers, 1992,119-120)。すなわち「スキンケア」をきちんと行い「適切な服装」をし、「レディとして振る舞える」などという商業教育のインフォーマルなコードは、女子生徒を賃労働の現場に結びつけただけでなく、家庭というもう一つの労働現場つまり家事労働の現場との媒介としても、有効に働いたのであった。商業教育はインフォーマルなレベルで、女子生徒の賃労働力化とともに「意図せざる結果」として家事労働力化も行っていたのである。

4. まとめと展望

本稿で論じたような、職業教育をめぐる「労働力再生産」過程に関する議論を図示すると次頁の図1のようになるであろう。

図1



この図では「労働力再生産」過程が技術を媒介としているか、あるいはインフォーマルなコードを媒介としているかを横軸に、再生産される労働力が賃労働力であるか家事労働力であるかを縦軸にとり、各論者の再生産論における対象領域、および職業教育・家庭科教育の再生産の領域をマッピングしたものである。「明示化された職業教育」においては、生徒に職業技術を教えることで賃労働者の再生産を行うことが指向される。また「理念としての家庭科」では、家事に関する技術を生徒に習得させることで、家事労働者の再生産が目指され

る。Katz, Willis, Kantor, Rodgersといった論者はインフォーマルなコードによる賃労働者の再生産に分析の焦点を当てているが、家事労働者の再生産は分析の射程に入っていない。Cliffordは女性の労働力化を技術による労働力再生産の側面から分析している。Powers, Tyack, Hansotは商業教育と家庭科教育を対象に据えているが、Powersは賃労働者のインフォーマルなコードによる再生産には言及しておらず、一方TyackとHansotは家事労働者のインフォーマルなコードによる再生産にふれていない。上野は家事労働者の再生産について分析を行っているが、そこでは家事に関する技術を介した再生産に着目しており、インフォーマルなコードによる再生産の側面までは扱っていない。Dalla Costaはインフォーマルなコードにも焦点を当てた家事労働者の再生産を分析している。

以上論じてきた職業教育をめぐる「労働力再生産」過程に関する新たな視座をふまえるならば、日本の「高度成長期」における職業教育、特に高等学校商業科をめぐる次のような分析を行うことができるだろう。

商業科の女子生徒に対して、経済界から女子事務員の育成が要求されたのを受けて、教育現場では和文タイプ等職業技術の履修単位が増加するという現象が見られた。こうして職業技術を媒介にした商業教育と労働市場との連結が強化され、商業科は労働市場の要求に沿う職業技術を持った労働者を生産する場としての性質が色濃くなっていった。

また日本の「高度成長期」には出生率の低下や核家族化が進んだが、こうした現象は経済界を中心に「家庭の危機」と認識され、女子生徒に家庭科教育を施すことの重要性が論じられた。1960年から女子生徒に家庭科が必修になったこととも関わり、商業科においても、家事労働の技術を介して教育現場と家庭という女性の労働現場とを連結させる回路が、フォーマルな形で作られていったのである。

しかし商業教育と女性の「労働」との関係は「職業」技術のみによって結びつけられていたわけではない。日本の「高度成長期」における商業科の教育現場では、職業技術だけでなく礼儀作法を身につけさせるべきであるという議論が見られた。その背景には、就職の際に学科試験以上に面接が重視されるという市場との関係があった。教育関係者の間では、面接対策として特に女子生徒に対しては礼儀作法を教える必要があるという考えが支持されていた。その背景には、採用条件として「容姿端麗」で「印象の良い」女子であることを挙げる企業の存在があった。さらに労働市場は有能な女性労働者の資質として、「協調的」「細かいことにまで気を配る」ことなどを重視していた。このように女子生徒をめぐる、労働市場と学校のあいだにはインフォーマルな回路づけが行われていたのである。このような女子生徒への労働市場の要求に対応するように、ある女子商業科では教育目標として「徳性の養」や「情操の陶」を行うことを掲げていた。

重要なことは、このように市場の要求に則して、「礼儀作法」の行き届いた「容姿端麗」な「印象の良い」女子生徒を産出することが、結婚を経由して家庭という女性にとってのもう一つの労働市場へ参入する際の有利な指標を彼女たちに与える結果にもなるのである。「協調的」で「細かいことにまで気を配る」ことができ「徳性」や「情操」の豊かな「有能」な賃労働者は、同時に「健全な家庭」を維持しつづけることができる「有能な」家事労働者

にもなりうるのである。女子に関して言えば、家事労働に関する技術だけでなく、「協調的」で「細かいことにまで気を配る」「徳性」や「情操」といったインフォーマルな回路によっても、家庭科教育は家事労働と接合させられていったのである。

このような視点から、商業科における「労働力再生産」過程、つまり商業教育の現場と広義の「労働」市場の関係づけられ方を、具体的な資料に依拠しながら検討することが次稿の課題である。

<注>

- (1) 本稿では職業教育において、「労働力」がどのように形成されるのかを問題とする。それゆえここでの「労働力再生産」という概念は、「文化的」再生産対「経済的」再生産、という二項対立によって分析することはできない。また本稿は中流およびそれ以下の階層に属する人々の労働力化に焦点を当てたものである。
- (2) 米国の進歩主義の時代 (Progressive Era) とは19世紀後半から20世紀初頭にかけて、産業構造の転換や移民の増加等米国社会の性質が大きく変化した時期を指す。
- (3) 家庭科教育の支持者は、下層労働者の女性が経済的理由から賃労働に従事する必要性は認め、下層労働者向けの商業教育 (Trade Education) の設立には積極的であった。本稿が米国の進歩主義の時代 (Progressive Era) における商業教育について言及する時は、中流階層向けの商業教育 (Commercial Education) を指している。

【引用・参考文献】

- Apple, M.W.・長尾彰夫・池田寛 (共編) 1993『学校文化への挑戦』、東信堂。
- Clifford, Galdine Joncich 1982 "Marry, Stitch, or Do Worse": Educating Women for Work", Kantor, Harvey & Tyack, David (ed.) *Work, Youth, and Schooling: Historical Perspectives on Vocationalism in American Education*, Stanford University Press.
- Dalla Costa, Giovanna Franca =伊田久美子 (訳) 1991『愛の労働』、インパクト出版会。
- 伊藤一雄ほか 1977『職業と人間形成』、法律文化社。
- 伊藤一雄 1998『職業と人間形成の社会学』、法律文化社。
- Kantor, Harvey & Tyack, David 1982 "Historical Perspective on Vocationalism in American Education", Kantor & Tyack (ed.) *Work, Youth, and Schooling*.
- Kantor, Harvey 1988 *Learning to Earn: School, Work, and Vocational Reform in California, 1880-1930*, The University of Wisconsin Press.
- Katz, Michael B. =藤田英典・早川操・伊藤彰浩 (訳) 1989『階級・官僚制と学校』、有信堂。
- 宮地誠哉・倉内史郎 (編) 1975『講座 現代技術と教育4 職業教育』、開隆堂。
- Power, Jane Bernard 1992 *The "Girl Question" in Education: Vocational Education for Young Women in the Progressive Era*, The Falmer Press.
- Rodgers, Daniel T. & Tyack, David B. 1982 "Work, Youth, and Schooling: Mapping Critical Research Areas", Harvey Kantor & David B. Tyack (ed.) *Work, Youth, and Schooling*.
- 鈴木敏子ほか 1990『資料からみる戦後家庭科のあゆみ』、学術図書出版社。
- Tyack, David & Hansot, Elisabeth 1990 "Differentiating the High School: The "Woman Question" ", *Learning Together: A History of Coeducation in American Schools*, Yale University Press.
- 上野千鶴子 1990『家父長制と資本制』、岩波書店。
- Willis, Paul =熊沢誠・山田潤 (訳) 1996『ハマータウンの野郎ども』、筑摩書房。